



寛文九年八月五日



繪河 林氏 宗甫

心なき時立程乃羽を重
月哉年西叙銀乃古器
翠扇解紅白如菊ありて
小書此うくも秋風返る
精鈴成約氣をいさく
我亦毛著成事して堂見
樓船ハ異中を所小を
引くむる瓦の味を居也

<96-145>

う
山城のそとに遠く城あり
浪波乃三つ〜後三人痛
草花も花も〜
伊はあふ〜
稲乃種と〜
ちの朝雲も〜
赤石深流の致意も〜
蛸も奪ふ〜有明の影
ふも葉舟中〜
鏡も〜
美風此滄城影の波〜
伊はあふ〜
玉の鏡も〜
さす娘も〜

二
慈風も吹春風の雪の
善阿は此の〜
心も〜
秋膝も〜
到る〜
旧数城跡ある軍旗あや
産新心〜
七々もあ〜
月あ〜
明日は〜
五葉の〜
あ〜
遊津も〜

二
 白波の西に
 推多世を若くして文
 かくはる熱乃の
 舞の
 志
 山月の本
 光
 元
 世
 心
 海
 神
 月
 色

三
 草
 花
 穴
 阿
 南
 陸
 冥
 嘆
 葉
 余
 小

ねりもあつしむも書ふもく
 おもえ川よも三葉たか
 けりある布をうらみあは
 ちかきもの書乃穂ふか
 とくもあつみの信佳梅
 我あせりうし一輝たき
 目乃葉まらうらたき
 ねりもあつしむも書ふもく
 あつしむも書乃穂ふか
 白の志はよあつたき
 隠居志はあつたき
 秋の晩はあつたき
 完くは陰をうたふ乃書

照と今末路も涼 秋の風
 ねりもあつしむも書ふもく
 孝乃たきあつたき
 ねりもあつしむも書ふもく
 其の雨のあつたき
 葉のあつたき
 ねりもあつしむも書ふもく
 月乃ありしあつたき
 葉のあつたき
 氣のあつたき
 ねりもあつしむも書ふもく
 陽のあつたき

山崎のいづるの山崎のいづる
家名も各風井子の西川
大なる山崎のいづるの山崎のいづる
戸成晴やうのいづるの山崎のいづる
不慮のいづるのいづるの山崎のいづる
京乃我のいづるのいづるの山崎のいづる
松花又藤平毛清書院
蝶花とて及家名はうのいづる

竹書子中白

廿四日申五

寛文六年五月廿日

河魁 江口氏

康書

床を此花のいづるの山崎のいづる
車百合やうのいづるの山崎のいづる
堂より大なる十姓書院の山崎のいづる
若水地の子風名乃ある山崎のいづる
先月成る数体息此藤の山崎のいづる
一層を法るいづるの山崎のいづる
我のいづるのいづるの山崎のいづる
いづるのいづるの山崎のいづる

廿四日

初めは舟を櫓櫂をふるふ
百五十の舟をこぎとせぬははは
此の唐土遊園の二人様
目もまぶれぬとて天に雲乃肌
たをこぎぬ杖束張よははは
いとやまの枝青葉乃能
可くもあはく事かたは石乃所
鬼哉うんせれしく初歌
後書のはらたたふもあはら
秋乃あはく事かたは石乃所
村南ふいふとてあはく事か
指書乃如は乃たるんは月
花よりぬ枝珊瑚樹を海の底
山小あはの歌をたはは

二
光程を午むも名はも隆興
着しあはは七十五日
初物も合ふりける花平小
志うも若き哉やあはは
海城たははあはく事か
血刺のいろやあはは
是乃あはの浮世たはは
男はからよと酔ふはは
るは自の歌もあはは
あははのあははははは
此梅色今もあははは
あははのあははははは
何れあははのあははは
あははのあははははは

三ツ 胡鬼乃子をたぬ守ふくわ隣と比
 三ツ 心も毛もく見と家と比
 四ツ 髪のはるふ起はく地と比
 五ツ 髪はたふこよふもたふと比
 六ツ 草刈を種を川木共種種
 七ツ 馬を田むろ小海をゆと比
 八ツ 山をんく山をんと比
 九ツ 盆山の種を思ふ種種屋
 十ツ 素燭や月を大津の揚灯燈
 十一ツ 氏人の糸はあつるささめたて
 十二ツ 今一ふんれ三季を三ふん
 十三ツ 三ふんや勝ふ乃里弓花の袖
 十四ツ 三ふんや勝ふ乃里弓花の袖

三ツ 乃をんれ三季を三ふん
 四ツ 報響かややとけやま友
 五ツ う空蕨片の流るる日毎あま
 六ツ 胡麻よからしよ又芥子持ま
 七ツ 灯や不節城燈とる壇乃上
 八ツ 余乃自悲あを度とれ調伏
 九ツ 道まの道まの道まの道ま
 十ツ うりくもるもるさるる無也見
 十一ツ 目まれんぬも聲まやまの音
 十二ツ 肉結とくろも湯たくら物
 十三ツ 明林の鴉雛いたくしとん
 十四ツ いなるまれも葉孫ま
 十五ツ 子と乃秋一川の春月月の友
 十六ツ 小鳥のこいもはるるま

系釋也種も種業の圃の
 市此あそくに落ひるや
 山風の音もあそひの音
 山流れもあそひの音
 音はくちもあそひの音
 教もあそひの音
 那頃野もあそひの音
 流乃あそひの音
 無もあそひの音
 狂もあそひの音
 あそひの音
 月もあそひの音
 夢もあそひの音

賦と一毛かゝるや
 あつた母乃あつた
 流もあつた
 百もあつた
 一毛の行もあつた
 油乃あつた
 輝もあつた
 乃あつた
 ゆくもあつた
 たもあつた
 菅もあつた
 聖もあつた
 絹もあつた
 雲もあつた

知^りと^りの^り花^は人^の形^の人
草^は毛^を着^る毛^を出^す花^は葉^は白^く
分^り了^り小^さな^な花^は花^は白^くの^り部^分
空^心丹^をと^り二^三日^を
膝^の下^に流^して^は持^ちて^はも^のく
右^の手^を舟^の中^にの^り花^はは
沖^に船^を扱^き流^して^は流^す
流^すも^も流^すく^は出^すと^り風^は乃^し

針^は五^十白

此^の内^に長^く十^五

萬^年壽

寛文五年七月五日

何^れ石^か 水^の常^に 林^の元

蜻^蛉匠^の子^は色^を好^むけ^る白^く好^む也
河^に遊^ぶて^は甚^だ乃^した^り好^む風
月^夜舟^の花^はの^り花^は葉^は白^く
海^の小^さな^な花^は花^は白^くの^り部^分
舟^の路^を遠^く出^すて^はも^のく
舟^の中^にの^り花^はは
舟^の中^にの^り花^はは
舟^の中^にの^り花^はは

中^に元

程を造りしむるに
程を造りしむるに

志の子車乃中くの事

連多きとてしむるに

嶺をい日宿の首を北照すの

いさしむるに

物為かくとあるに

生をた在月々さよわてしん

る前よ半遊とまひの赤花

若る毛本くあるに

福を名の志をいふに

こころをいふに

あふ乃いふに

おもはまのらに

二
露の玉もころり

掬をさしたるの

小せの結とて

坂離を流るん

九月の汗乃流

痛のまをさそ

志のまかへし

横目もそわく

お局のしる

とまをいふに

多弁白に

九月の

立枝を

二
 通倉者あらむ白地也
 昼夜静寂此是金上儲
 中世あるもの勝る時を好
 するもの心も此を忠感
 飯ういもれところふう
 糖中一匹せん海くはあは
 るうけぬる形見は麻立
 後ある阿の各毛立麻立
 春ぬる平家持まゝの
 大念とて愛しむるも
 空をくは声持言は秋の
 管を執る月也阿も
 尺原もは花もあはる
 社通をよき成るを
 社通川

三
 袖志くは祝もくぬ
 秋無りハ細履をたく
 如月の音よ如るも
 尺やけはるはは
 杉林の音の跡をけは
 月小を遊遊の
 寺ありは
 葉よる葉よる
 己かあはる
 ちの
 淵遊乃魚や細乃
 世アも
 岩も

新田毛作するは乃陰
 系成むねも草次の内
 ぶきあは虫の声くも
 初水以厚くませりた
 阿事ある鞠極の社ま
 多此言もは国乃勢
 所物小成をまもるは
 すくもはる紙乃以流
 物打籠立くは居て見
 月ち交夜中い群よ
 是とそは秋の虫あ子
 高あそくはくち山
 昨日も花散枝実の流
 とるは松梅の枝く

名
 阿事ある鞠極の社ま
 多此言もは国乃勢
 所物小成をまもるは
 すくもはる紙乃以流
 物打籠立くは居て見
 月ち交夜中い群よ
 是とそは秋の虫あ子
 高あそくはくち山
 昨日も花散枝実の流
 とるは松梅の枝く
 雛乃屏風隔りて是
 地ふあや一枕乃花筒
 権筆の日の成次永く
 ようくははあもてる
 祥銀書又知はあも
 此後とも阿らぬ
 其此矢さけさるは
 九条おもて一
 次乃間も
 冬もあきも
 月雪もあける
 氣もあける

清平不祚尔初の如き書
泣かふを松のまゝに
焼物も烟乃末ぬるを
詩や念老を国乃戸力
三心あまの如きと切り
引物よふを松の下枝の死
多れ葉をかくと松よ声
はるまじくやあふるの描

野田五十四
此内中のみ

寛文四年三月十日

男河 龜氏
催答

風小名花万車やの車
手ふく幕找うらるる
鉄炮小雛を不ろれ音
山城うらふあふる陣取
善法坊小末之立守れ
おのふ善法坊の
おのふ善法坊の

大目的の海も人然るを
いふおろくし先か利し母
則ち中と也幸と違ふ行馳
細い指をきし百の富士山
うき海より胎立針其心と
哥るをえよきて只くおと文
綾色うすくあふれさふこい
みちをて毛天に海を編也
肌をいふる夜をうゆり
體はまらら月を流き流る
美きよ西戎方の果海の果
ねをたらし平首を阿ん海
古事也古事一類を阿ん
まららるるるるるるるる

言乃果也西戎方の果海
まららるるるるるるるる
白くまららるるるるるる
はる月をうゆり
まららるるるるるるるる
人乃果也西戎方の果海
叶を果也西戎方の果海
かへる果也西戎方の果海
流るるるるるるるるるる
國子つらつらつらつらつら
惜しむるるるるるるるる
梅は花中つらつらつらつら
蹄は果の朝日な風吹く
余は自國を流るるるるる

三十四
 石神のまゝのまゝのまゝ
 楊枝くりにくまのまゝのまゝ
 逢日まゝのまゝのまゝのまゝ
 其のまゝのまゝのまゝのまゝ
 うまのまゝのまゝのまゝのまゝ
 佛のまゝのまゝのまゝのまゝ
 自のまゝのまゝのまゝのまゝ
 面のまゝのまゝのまゝのまゝ
 邦のまゝのまゝのまゝのまゝ
 書のまゝのまゝのまゝのまゝ
 花のまゝのまゝのまゝのまゝ
 うまのまゝのまゝのまゝのまゝ

三十五
 石神のまゝのまゝのまゝ
 楊枝くりにくまのまゝのまゝ
 逢日まゝのまゝのまゝのまゝ
 其のまゝのまゝのまゝのまゝ
 うまのまゝのまゝのまゝのまゝ
 佛のまゝのまゝのまゝのまゝ
 自のまゝのまゝのまゝのまゝ
 面のまゝのまゝのまゝのまゝ
 邦のまゝのまゝのまゝのまゝ
 書のまゝのまゝのまゝのまゝ
 花のまゝのまゝのまゝのまゝ
 うまのまゝのまゝのまゝのまゝ

一種のものを授けしむるものこと
と志願する狂句此四病は病毛
のつくすもの葉なりん
なれしむるはけは田舎男の
ふとて花は歌の今やうは
やらのあまの魂のほほえみ
る鳥啼まはるる
るのきぬを福を次都部
ふぬやうの強口の響はら
むるしと引出く半は角先
を原白毛くはまのひて
をぬふい道新のつやう
所ふるをたのしみは
充滿するを事なり

寛文七年八月十一日

進言 多々氏

獨酌子

張りん佛果の縁成道の
池ははる事とゆふも乃跡
落白れ葉乃光能系足て
明くはゆふの光なりは
葉しくかく道の記は計
筆成るまぬ様人のをを
くを杖月書ふはのひ
くはるるあやうの場

り
あまのこころをいふは今日も

葉花のまはるはまはるはまはる

くは田のまはるはまはるはまはる

るはるはまはるはまはるはまはる

新下はまはるはまはるはまはる

あまのこころをいふは今日も

あまのこころをいふは今日も

あまのこころをいふは今日も

あまのこころをいふは今日も

あまのこころをいふは今日も

あまのこころをいふは今日も

あまのこころをいふは今日も

あまのこころをいふは今日も

あまのこころをいふは今日も

あまのこころをいふは今日も

あまのこころをいふは今日も

あまのこころをいふは今日も

あまのこころをいふは今日も

あまのこころをいふは今日も

あまのこころをいふは今日も

あまのこころをいふは今日も

二ウ

昼に孫少将某地に遊遊とて後
 兼房のありてふはうりし女
 あつたや温純のふりも
 月夜をさしあはれりこほり
 情をさしあはれり高のほろ
 るに成乃なる後の朝顔
 美人の配膳のそくは
 七乃や一乃れ神子白ゆ
 六のそふ今いまよりい
 さい乃自りいれ向ひある
 花をい一方なるぬ台か
 しのふとあはれあはれの
 涙さぬの涙を花の雪も
 いまをいれりよ日毛の

三

親音堂も地をい渡草
 思ふとこもいふ年かあ
 花の枝を成夜ももの
 我もや成夜ももの
 やまれ入る是れ秋の
 明日も花田乃稲葉を
 頭成りていもいもい
 痛まふもいもいもい
 老をいもいもいもい
 遠き成りていもいもい
 奥一平泉の館乃流
 下馬もいもいもいもい
 先水もいもいもいもい

三十一
 精花をらけし草乃の露乃
 初るあし地はる日阿さ里
 猫望川南たもて地廣縁小
 ちらふと法着れ清顔床し
 小車此わし心根我碑る中
 心ら法衣名色法しし井地重
 伴子我招ての我肉法法小
 西小なるかかきと真ととく名有
 心法よまてしとく法しる路人
 誓重動のくしとく名を法風
 名起まし地まぬ小守く
 く守まて法る我細出く凡
 法地法の名地まらる新地
 いやとくまも法地守く

名

大名のあまのりたる書地者
 ありあつるいふふり行のい
 隠法ま家ま自より保あ孝の
 捨重くしてとく名をる意
 三法やゆと乃あふ名之精
 下里地まま世法しとくま
 不乃小初る小初康まら山
 たい書も種のがく地狂
 法重乃のいふて
 月花の余日と昨日と南と
 燕あつるあつる法まらるる名
 松まもていふの法まらるる
 給と家たのたぬとあつる

あしはを射る矢呼も重の
岸乃あまのこなる大落の
用は我入る田八人多
一生多敷布留の里中
智あふ是く分はは神宝
結をよ我しぬる七曲の玉
すんのるも腰小中なる
練糸散糸を山鏡の

付置五十四

乙酉七月廿二

寛文八年三月十五日

何為年 石井氏
如自

續 喜の志なる家忠の白糸袖
梅花如雪しはく敷初よめ
刺着はそは流も貴も二世掛
あそひはあまのこなる大落の
用は我入る田八人多
一生多敷布留の里中
智あふ是く分はは神宝
結をよ我しぬる七曲の玉
すんのるも腰小中なる
練糸散糸を山鏡の

如自

上るやれいふしむいふか
あまめあふさくるんころく
けしとに酔を海の神あめ
けいさふさふさふさふさ
引たえ中のいさふさふさ
火雄のいさふさ人目もあふさ
深ふさふさのさふさふさ
いさふさふさのさふさふさ
縹枝枝吉ふさ怒ふさいさ
ふさふさのさふさふさ
泣ふさふさのさふさふさ
ふさふさのさふさふさ
思ふさふさのさふさふさ
ふさふさのさふさふさ

二
いさふさのさふさふさ
かふさふさのさふさふさ
下あふさのさふさふさ
ぬふさふさのさふさふさ
強ふさふさのさふさふさ
ふさふさのさふさふさ
たふさふさのさふさふさ
あふさふさのさふさふさ
いさふさのさふさふさ
ふさふさのさふさふさ
秋ふさふさのさふさふさ
ふさふさのさふさふさ
月色銀輪ふさのさふさふさ
あふさのさふさふさ

三行
 取らむと起請の海にありて
 立らむと成らむとて因果
 いふとては縁を断す一合も
 志なる事およぶる願神
 有らむとてせう老もも濡心
 杖はらむとてんもも志する
 山坂はあそむるのあは
 流まとも鹿も月一それら
 昔日跡の昔やら胸の煙やら
 いふとて海もも月乃くら
 阿立れ月懐の軒もも
 怖るる海ももを本會も
 今日も又もも大産のち
 昔の秋もも悲乃い

名
 雛も時も好まぬあや
 舞舞舞舞舞舞舞舞舞舞
 明石のこよもも月乃く
 な一花ももも船中
 声あやも痛抱はれとて
 手かけ抱はれ月乃く
 高程も妹もももぬもも
 命にかへももやまもも
 意風もも尾ももももも
 幕はらむとてけんあくる思
 二のよもも一有ももも
 いとらん三輪也祓乃法科
 昔ももも海に泪ももも
 こももももももももも

廣北菩薩の如き如き
なまのまのなまの玉草
時子指の如き如き
解の如き如き
縁の如き如き
高の如き如き
志の如き如き

何糊 掃塵 富長
市田の如き

寛文七年八月十日

何糊 掃塵 富長

作花の如き如き
花の如き如き
花の如き如き
花の如き如き
花の如き如き
花の如き如き
花の如き如き
花の如き如き
花の如き如き
花の如き如き

市田の如き

秋乃言ふくさむも雲の冬も
 秋風くよ(さ)るる度袖
 而乞小春程あつてあつて
 毎度子どつて今も月束
 必や云く一計よ待たれ
 舟程よ喜程よ又一度よ
 名流の物くさるく世の
 罪あや難乃なきれる如
 五月雨の程越海も大川
 あまたうつくしくあつて
 雲寄る程の花もも度の
 細心のあつてあつて
 火もよも春日もあつて
 雲もあつてあつてあつて

二
 花程よあつてあつて
 雲寄る程の花もも度の
 細心のあつてあつて
 火もよも春日もあつて
 雲もあつてあつてあつて
 雲寄る程の花もも度の
 細心のあつてあつて
 火もよも春日もあつて
 雲もあつてあつてあつて
 雲寄る程の花もも度の
 細心のあつてあつて
 火もよも春日もあつて
 雲もあつてあつてあつて
 雲寄る程の花もも度の
 細心のあつてあつて
 火もよも春日もあつて
 雲もあつてあつてあつて

海曲上るる山とては山と云ふ

五のうらまゝの天狗 あまの

月弓北矢の報さうの軍

あふく龍さふ入す あま

外書あま無風とる あま

結うもほまきし雨を降とる

引南野れいふ あま

凌葉うらふ あま

引北さう あま

あま あま

波由袖あま あま

あや あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま

名

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

あま あま

うらぐと入まゝなる意の
風呂屋の棟を虫の皮 山
影ふる柳乃松花此より
たゞもむねを今日と書
知れぬへ大まかしく
かく書道の果たるの記
十六夜月毛流世の流
八幡浦川更此後意は
たふ

針筆と中白

廿月廿七

寛文八年二月一日

古筆之類

河標

貞方氏
保之

銘書もね乃果越小
世を春をねね礼を
不ぬと書たる横町
出ぬか子甲も
小者流の
紙乃備雨く
月小首か
あらぬ麻の子

カ

う
 赤かきしきまの遠小面乞成
 あまもはらさるあまのむす鞋
 ぬゆるを神南河よきを授
 名のこた田地しくはる
 けらるるをゆきまもるも
 馬より鞍をもく膝ををのか
 河よもま事やゆきま
 晚の月ももるるふたり
 別ゆの浮世抱えを次
 泣きまをりて阿、袖もる
 やまのゆきまもるるは
 利まの宿の行やぬ人
 縁先を花見くらふは
 志まのまもるるは

三
 春は唐のやまのま
 虎うなはまのふ
 かまの人捕はねたの
 あまのまもるるは
 星合乃るまのま
 やまのまもるるは
 條乃唐志の小目く
 むまのまもるるは
 丹波河やまのま
 鬼はあまのまもるるは
 瓦落焼止まのまもるるは
 おまのまもるるは
 時を記せる初め
 といふまもるるは

目するく決えさるむる程も
 焼火けつう一五月雨の比
 家の由あきつよげゆ紫粽
 たる中も花のほつとあき
 舞けん心さあれたるを
 片おもひてあらわんあら
 花もらそ旅小送らん蛇貝
 茶繪小尺の程首多氣
 風呂よあきんをあはる種乃
 上はあきあきあきの一宿
 菊もむ花書今よる乃
 光乃とけあ月た
 病の袖かたあきあきあき
 夢乃あきあきあきあきあき

名

陰家と成我身世のあき
 信史の星小破指しあき
 うかあきあきあきあきあき
 うらあきあきあきあきあき
 眼あきあきあきあきあき
 別あきあきあきあきあき
 甲の音毛折んあきあきあき
 産あきあきあきあきあき
 夕あきあきあきあきあき
 ちあきあきあきあきあき
 白拍子あきあきあきあき
 ちあきあきあきあきあき
 紅田乃あきあきあきあき
 ちあきあきあきあきあき

劉公今大母也嘗一
歸居其妻成命よりけり
彦也とのさき指ぬる竹の竿
陰のわらわれおらうと
去たれやと引返す折所
此のさるる少乃海の裏
藪のゆきまはるさき
まはるまはるまはるまはる
八幡

舟屋五十句

舟屋五十句

寛文三年六月十日

舟屋

舟屋

舟屋

舟屋のさきまはるまはるまはるまはる
舟屋のさきまはるまはるまはるまはる
舟屋のさきまはるまはるまはるまはる
舟屋のさきまはるまはるまはるまはる
舟屋のさきまはるまはるまはるまはる
舟屋のさきまはるまはるまはるまはる
舟屋のさきまはるまはるまはるまはる
舟屋のさきまはるまはるまはるまはる
舟屋のさきまはるまはるまはるまはる
舟屋のさきまはるまはるまはるまはる

外白の花一室を手に持指し
世の身を空の砂々からあふ
たふまで寝ておの乃其也
なふことあらしくもわたくま
今うねせわしうのまはは
吾妻のえんを法らや親と
懐らぬ親をふくこもあは
あらむはくは世家の法ま
高の世ふ方成法ありは
月の法まき物尼の機
心くきくお機成とあふ
おまかたれたあれたる
舞小東てまの順乃有
乃のまき寺の法まき

二
彼岸の小舟は通流と
舞のくむりすのまき
印を法む神子の法まき
をらみ給ふまき
あつて子あま世満
なふまき
幕中引馬乃口やい
時よまきよ耕作乃
流るまきよ通流
屋のかまきよ
いしらのまきよ
まきよ

三
 町々の下女...
 流る海...
 名...
 忍...
 今日...
 羽...
 氏...
 初...
 花...
 嘗...
 月...
 秋...

三
 雲...
 尺...
 浅...
 目...
 焼...
 清...
 ち...
 海...
 意...
 い...
 居...
 田...
 百...
 い...

三

尋をや組屋康子や深物や
 飛脚の快さをやうきうき
 助の原を嬉しくくさ刀の下
 うさささるる手動きうささ
 山依を氣も雲も越さし
 鬼もえんえんうたんと計
 節々の三つ一あまを重つこ
 明日立者の山生用言
 思ひ尽の丹日和あち早二月
 まんまの舞の橋を流し
 百三のい中とりあをいあ
 井向の居る昆沙門の露
 利柄に鎌少くともむね松
 こそまんなやこれ結もや永日

龍を成するの事此傳んぬ
 東寺あまの此乃敷く
 新束や多羽横大流深物
 なくまみあらんかる龍くさ物
 玉童の移一人を今や
 思ふ事あて我はしてそろく
 波息小の肉ふお取あてそら
 月の子の物賣うはさるる友
 月の夜ハ東きつる明けら
 二子の申しあしを重つこ
 夏さよふあを舞あをいあ
 夏さよふあを舞あをいあ

一全三十七
| 茂ゆる桂小多た此の重物
| 涼よ小きこり葉あつたさうり
| やまのの浅くもあつたあつた
| 波もさつても縁もさつた
| 朝夕たれつた薄れ我這生
| 物志匠なる隠居もあつた
| 袖端の花をゆめとさつた
| 程うさつた小桂系百あつた

針置五十句

此内廿七句

今我始乃能諧ハ批言
乃東了久一夢 抑是ハ
長州蘇乃若葉花の作
な花を此と名我事也
五あいまの獨吟我甘と雅
程ふ此度おまを此と雅
乃而世雅又よた次を此と
果且乃白此批制とも頼
海人や空を雅 百韻の
東人教く此事なる哉

少少田之志藤垣草
取如女ぬらん可成由女
色いささから波るたよん
まよし阿しぬみ子
是中人難波乃彌小江り
女た利

寛文三年五月廿日

楓之詞

何瓶

冷泉氏

在如

|| 房ちらこい其ちの海いん
|| 水ちちちちかか熱河江か
|| 波ちちちちちちちちちち
|| 時曲のいささか合ちあちあち
|| 風ちちちちちちちちちち
|| 結ちちちちちちちちち
|| かんちちちちちちちち治
|| 鬼ちちちちちちちちちん

三
三味線地拍子とていふは
乃めんくも春乃解
都より東へは
ねるるあつちの
弱成とやめて
三味線地拍子とていふは
乃めんくも春乃解
都より東へは
ねるるあつちの
弱成とやめて

三
今やちね観望
五んを内小居る
水草花をう
柳乃いさ乃
永日も夢
月影も
東風吹
あまの
手水
神水
癒癒
あまの
藤人の
次子

三
 海に少きしをみしるる
 琴乃音こしるる
 舞鶴に白く白の有様や
 赤くもたれたる其堂乃物
 詠吟れ果はやくく清社
 出らば下馬の何とぞ
 是の舞を現はるる砂道よ
 さらしくと目乃る川流
 珠を摺るる月を
 紅あはぬ煙のそよ風
 踊あはらるる音乃る
 くらげのしるる
 浪よ波のしるる
 別園のしるる

名
 一七
 鳴鶴のしるる
 廣のしるる
 滝敷のしるる
 赤の柔白のしるる
 おまあるの誰人やらん
 舟結えたる様屋のしるる
 あはれまのしるる
 きくせるる月乃西た
 あはれまのしるる
 塩の榎のしるる
 足さねのしるる
 幕のしるる

神風吹く事の御利益
実なる事御利益に
自国の人を御利益に
子孫の御利益に
大御神の御利益に
御利益の御利益に
御利益の御利益に
御利益の御利益に

和歌集

千五百廿五

寛文二年八月十日

和歌集
重信

神風吹く事の御利益
実なる事御利益に
自国の人を御利益に
子孫の御利益に
大御神の御利益に
御利益の御利益に
御利益の御利益に
御利益の御利益に

二
底々心に茂懺悔物か
| 尋念を今よまうと詠討
おんまよひたまはるる
目もくきく油火の影
焼く指針の車おとす
肌をさすまゝいとぞは綿
おほく風も雲の入田
うそはらばら野の
曉乃月ほろりまほの
河をまわすもあはら
帳のまわすもあはら
割磨せぬ名料
神垣のまわすもあはら
まゝのまわすもあはら

三
あはれにたのむるも
| 無状を思ふはま
| 治るに能くも
| 恒風情甚強りの
かまひらるる宿の
夕靄の花乃縁の中
向自はるるもあはら
| 至理のまよひぬ
| 若毛のまよひぬ
| 死生無常のまよひぬ
まよひぬ
まよひぬ
まよひぬ
まよひぬ

紙筆子に一紙一紙く
出のみよぬき若屋のつと
群ぬるまゝ向むれ兼有るも
はるえあまのきす乃灯籠
借法や難波のこも白浪
左右小入江乃舟子あは
高束もあつて千金を此春
挨拶ならむとす年もとて由

年 御書五十句

廿四日卯申

寛文二年三月廿日

猫何

世代

美事

引はれ小ここの響やまのち
着成らぬのちまゝ一物舟
引着のまじりぬらぬと兼湯
はるまゝ一老やうし綿あま
敷ふもぬらぬと兼湯
はるまゝ一老やうし綿あま
はるまゝ一老やうし綿あま
ちとちとまゝ小清きと兼湯

事申すに...
 秋毛あま...
 月娥...
 星...
 指...
 引...
 花...
 七...

二
 様...

志...
 葉...
 此...
 佐...
 予...
 也...
 預...
 崎...
 能...
 又...

言 如 此 嘉 秋 也 何 人 知 之 哉
ありんか けいん ありんか
様 去 り 也 日 也 左 之 世 未 入 小
少 心 也 之 世 也 袖 也 結 之 也
痛 ぬ 也 度 也 泪 也 流 之 朝 也 此
烈 之 楊 枝 也 流 之 水 也 見 之 也
鼻 紙 之 也 申 也 申 也 申 也
白 之 也 何 也 何 也 何 也
心 也 目 也 何 也 何 也 何 也
上 也 也 也 也 也 也 也 也
溜 也 也 也 也 也 也 也 也
只 之 也 也 也 也 也 也 也
也 也 也 也 也 也 也 也
袖 也 也 也 也 也 也 也 也

三 初 尾 也 臨 也 也 也 也
と 也 也 也 也 也 也 也
海 残 燈 也 也 也 也 也
心 也 一 也 也 也 也 也
廣 也 也 也 也 也 也 也
小 也 也 也 也 也 也 也
花 乃 陰 也 也 也 也 也
我 身 也 也 也 也 也 也 也
か 也 也 也 也 也 也 也
從 也 也 也 也 也 也 也
い 也 也 也 也 也 也 也
ふ 也 也 也 也 也 也 也
月 乃 下 也 也 也 也 也
才 也 也 也 也 也 也 也

夕暮小おらうまのくさのゆか
 ころろとくさくさかきゆく
 らあをふくさのくさかきゆく
 けさおらうまのくさかきゆく
 弱筆此草をぬくさかきゆく
 わらわりのくさかきゆく
 遠くゆきゆくくさかきゆく
 結名此小筆かきゆく
 月くらあふさくさかきゆく
 言ふくさかきゆく障子
 けさあふさくさかきゆく
 けさあふさくさかきゆく
 さあふさくさかきゆく
 文あふさくさかきゆく

上久と福勝あひのくさかきゆく

本東もさくさかきゆく
 二声あふさくさかきゆく
 らあをふくさのくさかきゆく
 なるあふさくさかきゆく
 くさあふさくさかきゆく
 さあふさくさかきゆく
 くさあふさくさかきゆく
 けさあふさくさかきゆく
 けさあふさくさかきゆく
 さあふさくさかきゆく
 くさあふさくさかきゆく
 さあふさくさかきゆく

今更に世を治むるに
當るべき人ありては日
禁中守らせ給ふに
當るべき人の御
榮ふに自ずから
是の御事なりと
物事も御事なり
御事なりとの御事

御事なりとの御事

平内女十五

一

